

地域連携・フロンティアセンター

平成 30 年度実績報告

目次

I. 目的と運営	1
A. 目的.....	1
B. 組織運営	1
II. 事業	3
A. 地域連携部門	3
1. 公開講座	3
2. 広尾中学校模擬授業	5
B. 災害看護部門	6
1. 武蔵野市地域防災活動	6
2. 広尾地区防災連携会議	8
3. なみえプロジェクト	10
4. 和歌山県湯浅町学校防災プロジェクト	11
C. 継続教育部門	12
1. フロンティアセミナー部会	12
2. 認定看護師スキルアップ研修部会	13
3. 実習指導者研修部会	15
D. 実践研究部門	21
1. ケアリング・フロンティア広尾	21
1) リサーチ・フェスタ	21
2) “最期まで自分らしく生きる” プロジェクト	24
3) UNICEF/WHO 母乳育児支援 20 時間コース	25
4) 小児看護研究会 CandY (Children and You)	26
5) 精神科看護事例セミナー	27
6) TRC 研究会 (Total Renal Care)	27
7) セルフケア能力を高める支援の検討会 (SCAQ 研究会)	28
8) シームレスな看護師教育モデルの検討	29
E. ホームカミング・デー	30

I. 目的と運営

A. 目的

日本赤十字看護大学地域連携・フロンティアセンター（以下、フロンティアセンターという）は、大学がこれまで蓄積してきた知的・実践的な活動をもとに、人々に求められる看護の可能性を追求し、開かれた大学をめざして平成17年8月に開設された看護実践・教育・研究フロンティアセンターをその前身としている。

新たな発想で創造的な活動を行う必要があるとの共通認識のもとにスタートして10年目を迎えた平成27年度、地域連携の推進をその活動の中心に据えることをその目的に加え、本学が掲げる地域連携ポリシーのもと、地域連携・フロンティアセンターとして再び新しい出発となった。

平成29年度4月より、地域連携委員会とフロンティアセンター運営委員会が統合され、地域連携・フロンティアセンター運営委員会となった。その際、本学の地域社会連携ポリシーについては地域社会連携、産官学連携を強調した改正を行い、それに伴い組織、機能に関する規定も下記のとおり改正した。

本センターは、建学の精神である人道に基づき、地域住民の健康と福祉に資することを目的に、以下の機能を果たすこととする。

- (1) 多様化する地域社会の中で、求められるニーズに対応しつつ、新しい看護活動の実践を推進する。
- (2) 看護実践の研究活動を通してその知見を学内外に発信する。
- (3) 看護大学としての教育機能を、国内外の社会に貢献する資源として活用する。
- (4) 開かれたフロンティアセンターとして、臨床看護実践者をはじめ学外の研究者等と協働する場を提供する。

B. 組織運営（図1）

フロンティアセンターの活動は、①地域連携部門として、公開講座、広尾中学校の模擬授業、②災害看護部門として、地域防災セミナー、なみえプロジェクト、広尾地区防災連携会議、③継続教育部門として、フロンティアセミナー部会、認定スキルアップセミナー部会、実習指導者研修部会、ホームカミング・デー、④実践研究部門として、実践と教育との連携の中で実施するリサーチ・フェスタ等のケアリング・フロンティア広尾の活動がある。

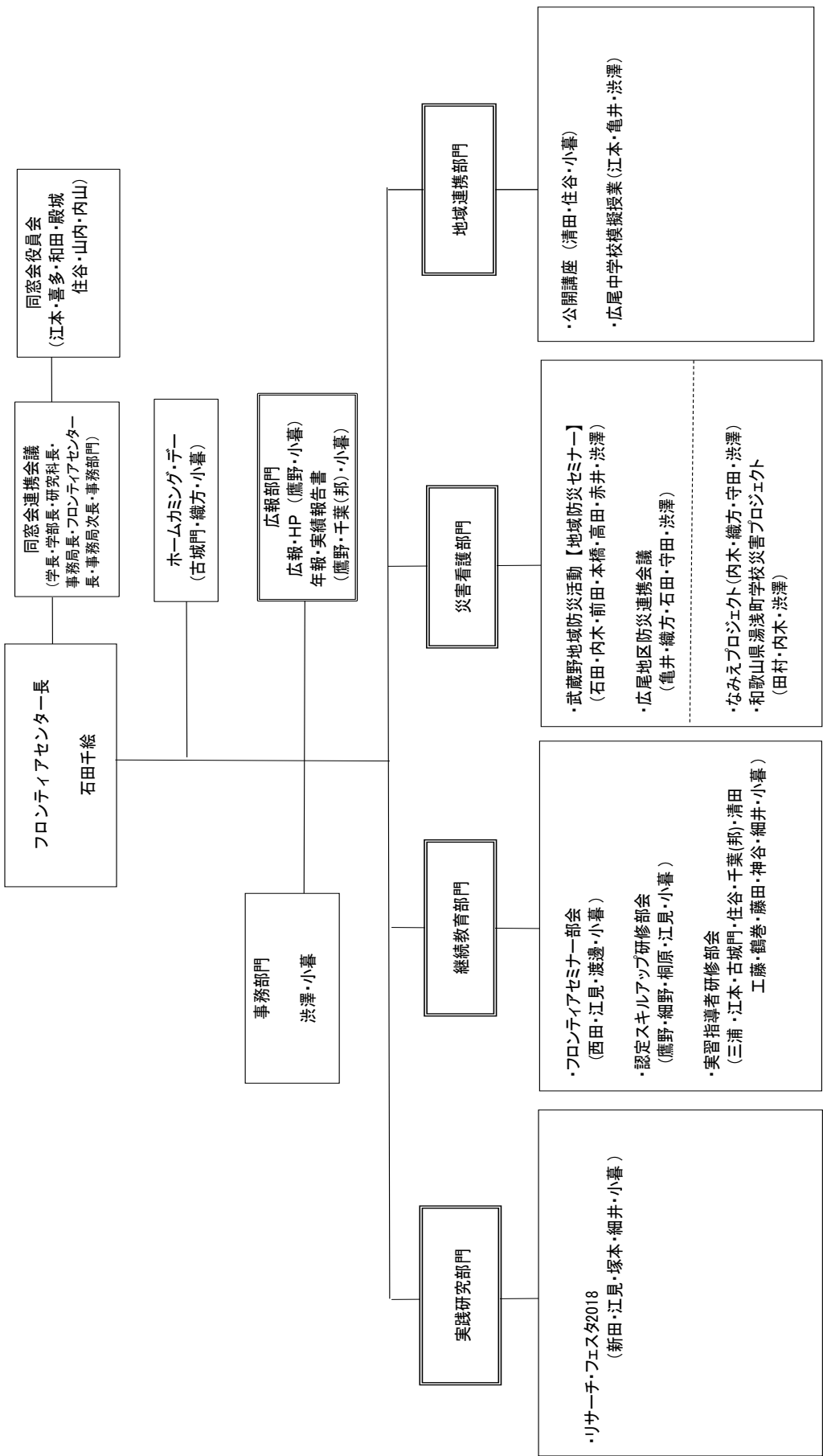
同センターの運営は、地域連携・フロンティアセンター運営委員会において検討している。平成30年度、運営委員会は、年11回開催し、①年間計画及び会計・予算、②各事業の運営等について検討した。運営に関わる財源は、原則として自主財源である。フロンティアセンター専従の職員は雇用せず、事務局が兼担している。平成29年度の各事業実施にあたっては、学内の教職員のほか前年までの事業の参加者、修了者など幅広い力を得て運営した。4つの部門のうち、③継続教育部門の中の、「実習指導者研修会」は、来年度より同窓会予算が付与されなくなることを受けて、参加費の見直しを行った。

平成25年度より開始した広尾地区の保健医療福祉・教育が一体となってケアを創造するシステムとしての「ケアリング・フロンティア広尾」は6年目となり、日本赤十字社医療センター、日本赤十字社総合福祉センター、日本赤十字社助産師学校、日本赤十字社医療センター附属乳児院等と協働の独立した組織として各プロジェクトの5年間の評価を行い、次年度以降の方針を確認した。また、今年度から部会メンバーの人員削減が行われ、「企画」の役割を主に行うこととなった。そのため、本学の教職員全員が、本委員会のいずれかの活動に1回以上参加する仕組みをつくった。この仕組みは、年度の途中から始めた新しい企画であり、引き続き評価をしながら、来年度につなげていく必要がある。

今年度末に、渋谷区との協定（S-SAP）を締結する予定であり、今後も地域社会との連携の一層の強化をめざし、新たな組織体制と活動を推進していく予定である。

図 1 平成30年度 日本赤十字看護大学 地域連携・フロンティアセンター運営組織図

平成30年5月24日



備考: ケアリング・フロンティア広尾ー平成29年度3月末現在 実践活動4事業 研究活動3事業の計7事業が活動している

Ⅱ. 事業

A. 地域連携部門

1. 公開講座

公開講座では、一般公衆の保健福祉看護に関する知識の向上を図るため、平成 9 年度から一般の方を対象に開催をしている。相互に研鑽し合えるような住民参加型の公開講座を目指し、これまでも参加された方々からは、時代のニーズに即し生活に活かせる内容であったとの意見もいただいている。現在は教員の教育研究成果を社会に還元し、高齢者向けの生涯学習支援として開講しており、多くの高齢者の方に参加いただいている。

平成 30 年度は、「学ぶ 楽しむ 心豊かに健康を保つ」をメインテーマにした。第 1 回「心豊かにする心理学」、第 2 回「ことばを楽しく科学する」、第 3 回「音楽を楽しむことと健康 歌う楽しみ・聴く楽しみ」の全 3 回の講座を開講した。

a. 趣旨

身体健康だけでなく、充実感や豊かさにつながる過ごし方から健康を考えることをテーマとした。また、学ぶことや楽しむことを体験するために、2 回目・3 回目は参加型の講座として行った。

b. 活動内容

第 1 回目は、9 月 7 日（金）に本学の心理学の教授である遠藤公久先生より、「心豊かにする心理学」をテーマにご講演いただいた。ポジティブ心理学の観点から、主観的幸福感、笑い、フロー、人とのつながり、レジリエンスなどをご紹介いただき、様々な研究結果をもとに、これらが健康に大きく影響していることについてお話いただいた。心の豊かさに重きを置きたい人が増えている中で、ポジティブな物事のとらえ方や、挑戦し何かに没頭すること、意味を見出して生きることの大切さについて考える機会となった。参加者の皆さんは、まさに没頭してお話を聞かれており、「あつという間の時間だった」、「もっと聞きたかった」とのご感想も寄せられた。また、「ポジティブに生きることやレジリエンス志向の大切さが分かった」、「心身ともに健康に幸せに生きる為の知識や方法を教えていただいた」などの学びに関するご意見や、人とのつながりを大切にすることや多様性を受け入れる考え方など、今の仕事や生活の中で行っていることの意味付けや再確認ができたという感想も聞かれた。自分の生活を振り返り、心豊かに生きるための指針を得ることのできたご講演だった。

第 2 回目は、9 月 28 日（金）に本学の英語学の教授である川崎修一先生より、「ことばを楽しく科学する」をテーマにご講演いただいた。普段、何気なく使っている表現には“自然な文”と“不自然な文”があり、両者を丁寧に比較することで、ことばの背後にある規則を解明する、というご自身の言語研究の知見を踏まえて、日本語として正しい表現について例文を挙げながら丁寧に説明いただいた。また、日本語のみならず英語についても、主語と補語の数的（不）一致現象に関する興味深いお話をいただいた。講義の開始時に、「ワークショップ形式で、参加者の皆様とざくばらんなやり取りを交えながら進めていきたい」という川崎先生のご意向が伝えられ、講義中にも参加者の方より質問やご意見をいただきながら参加型で楽しく学ぶことができる時間となった。講義後のアンケートにも「言葉のキャッチボールのある講義はとても楽しく良いと思った」、「面白かった。頭の中をフル回転した」、「楽しい講義で、日本語にも英語にも興味が増した。2020 年オリ・パラに向かって、もう一度英語を勉強しようと思った」など、言語学というやや難しい内容ではあったが、川崎先生のユーモラスな講義を楽しむことができたというご意見が多かった。

第3回目は、10月31日（水）に本学の博士後期課程にも在学されている森祥子先生（東海大学医学部看護学科）より、「音楽を楽しむことと健康 ～歌う楽しみ・聴く楽しみ～」をテーマにご講演いただいた。前半の講義では、音楽の生理学的・心理学的・社会的な働きや音声をつくる運動について、歌うことと健康とのつながりについてご説明いただいた。また、嚥下体操でも使われる「パ・タ・カ・ラ」体操を「故郷」の曲に合わせて参加者のみなさんで歌い、歌と嚥下機能の維持とのつながりを体感されていた。その後は、ピアノ演奏のもと、テーマの通り、参加者のみなさんと歌を楽しみ、また、先生の歌を聴くことを楽しみ、たくさんの日本の歌を満喫されていた。アンケートでは、「初めての経験の講演で、楽しいひとときだった」、「涙が自然と出てきました」、「歌うことについての新しい発見があった」、「歌での回想法はとても参考になりました」と、今年度のテーマに沿った心豊かなひとときを過ごすことができた講座となった。

c. 来年度の課題と展望

例年、高齢の参加者が多いことを踏まえてテーマを設定してきたが、今年度は幅広い年代の方にも興味・関心をもっていただけるテーマを検討し、30～50代の方々への参加もみられた。来年度は、講義内容のテーマだけでなく、具体的な内容等についても事前に周知し、様々な世代の方々が各々のニーズに応じて参加できるようなプログラムを検討していく。



2. 広尾中学校模擬授業

a. 趣旨

2014 年度より、本学と同じ区内にある広尾中学校の要請を受け、中学校の科目である「総合的な学習の時間」のうち 1 年生を対象にした福祉教育に位置付けられる学習の一部として、本学の強みを生かした体験学習を提供することを目的としている。

b. 活動内容

平成 29 年度は、優しい気持ちをはぐくむことを目的とし、本学の 3 領域（国際・災害看護学領域、小児看護学領域、地域看護学領域）により、①災害時の応急処置（三角巾の使い方）、②赤ちゃんとのコミュニケーション、③言葉の障害を持つ人とのコミュニケーション（文字盤などの使い方）で構成された体験学習を 12 月 1 日に実施した。

平成 30 年度は、昨年度と同じ 3 領域の協力を得て同様の内容で実施することを計画していた。しかし、中学校の担当者が昨年と交代したため引継ぎがうまくいかなかったことや、中学校の担当者との連絡手段が電話か FAX に限られていたためタイムリーな相談が困難であったこと、中学校側は高齢者体験を特に希望していること、中学校側が希望する時期と本学で実施可能な時期の調整が困難であったことなどから、実施を断念した。

c. 来年度の課題と展望

- ①2019 年度に入った時点で中学校側の担当者を把握し、メールでのやりとりも可能な連絡手段を要望しつつ、模擬授業の必要性を相談する。
- ②中学校側の要請を確認した後、中学校側の要望と本学で提供可能なものと一致するかなどを相談する機会を持ち計画を協議する必要がある。

B. 災害看護部門

1. 武蔵野地域防災活動

a. 趣旨

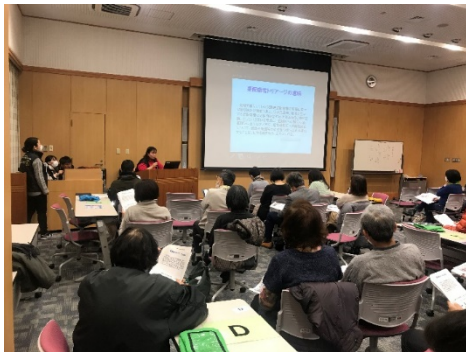
武蔵野地域防災活動は、本学前身の日本赤十字武蔵野短期大学時代の平成 16 年より始まった。地域の人々とともに身近な防災の知恵と技を獲得し、災害に強い人材を育成することを狙いとし、平成 30 年度で 16 年目である。

武蔵野キャンパスを中心に武蔵野市民防災協会、行政と協働し、防災ボランティアセミナーを開催してきたが、本年度はセミナー企画として年間 12 回（平成 30 年 10 月～平成 31 年 3 月）の「避難支援活動協力員養成講座」（表 1）を開講した。昨年同様、武蔵野市役所で開催した。



b. 活動内容

セミナー開催に伴う運営経費は、本学と武蔵野市が半々に拠出している。地域防災活動のメンバーは、本学教職員、地域の自主防災組織所属の住民、赤十字社員、企業員、他大学教員、近隣の病院所属の看護師と多岐にわたる。



更に本学の学生災害救護ボランティアサークル（SKV）がメンバーとして一緒に企画運営に加わり、参加者のファシリテーターとして機能していることが特徴である。本学学生は、地域住民と共にディスカッションやシミュレーションを通して交流しながら、地域防災について学ぶことができる。学内では得られない住民との交流を通しての学びは意義が大きい。

各回の参加者数は 30～50 名と幅があるが、平成 30 年度の全 12 回のセミナー参加者は延べ 499 名であった。

16 年間にわたる武蔵野地域防災セミナーでは、「官」

「民」「学」が一体となって地域防災活動に取り組んでいる。首都直下地震、南海トラフ地震などが懸念される昨今、行政のみならず、地域住民にとっても防災対策は喫緊の課題である。

c. 来年度の課題と展望

受講者は、武蔵野市内のみならず東京都内、関東、東北、中部圏に拡大していることから、「地域防災セミナー」の果たす役割は大きいといえる。「地域防災セミナー」で得た知識・技術・態度が日常や地域防災活動等で活用され、災害時の備えとしてさらに熟成されることを期待する。



表 1 避難支援活動協力員養成講座

№	日 時		内 容	会 場
1	H30 10/13 (土)	9:30～12:30	開講式 講話「避難支援活動協力員とは？求められる活動は？」 講話「災害時何が起きるのか？そのために今何をすべきか？」 講話「避難所の開設における行政の役割と官民との連携」	武蔵野市役所 西館
2		13:30～16:30	防災ゲーム「災害時の判断力と支援者の心構え～クロスロード～」	
3	H30 11/10 (土)	9:30～12:30	講話「武蔵野市の地域特性と自主防災組織、緊急避難所～西日本豪雨災害を受けて～」 シミュレーション：DIG（Disaster Imagination Game） 「地域を知り、どう避難行動支援するか」	
4		13:30～16:30	基調講話「災害時、現場における要配慮者の対応と課題」 パネルディスカッション「母子支援を中心に」「災害時の母子支援」	
5	H30 12/8 (土)	9:30～12:30	講話「地域ではじめる防災まちづくり、官民学との連携」 「災害の種類と災害サイクル及び避難指示発令時の対応」 シミュレーション「避難行動支援、武蔵野版 HUG を用いた避難所の開設運営」	
6		13:30～16:30	講話・シミュレーション「自宅及び避難所のトイレ使用の可否と対応」	
7	H31 1/19 (土)	9:30～12:30	講話「夜間の避難所体験」 シミュレーション 「要配慮者トリアージ ～どう防ぐ災害関連死～」	
8		13:30～16:30	講話「災害とパブリックヘルス」 演習「要配慮者のお世話の方法」	
9	H31 2/16 (土)	9:30～12:30	演習「被災者及び支援者のこころのケア、傾聴訓練」 演習「癒しのケア」	
10		13:30～16:30	講話「様々な要配慮者への対応」 シミュレーション「在宅避難の備え」	
11	H31 3/16 (土)	9:30～12:30	講話「避難所における食品衛生」 講話・演習「口腔ケアで避難生活の健口そして健康を！」	
12		13:30～16:30	基調講演「地域防災をにこなう人」 シンポジウム「避難支援活動協力員としての今後の活躍(仮)」 閉講式	

2. 広尾地区防災連携会議

a. 趣旨

プロジェクトの目標は、広尾地区の日赤 6 施設（看護大・医療センター・総合福祉センター・乳児院・助産師学校・幹部看護師研修センター）の連携と各施設の防災機能の強化と人材育成、災害時のスムーズな連携を目的とする。さらに行政・医師会・住民組織等を巻き込み、広尾地区における防災連携範囲を広げることであった。

b. 活動内容

1) プロジェクトメンバー

日本赤十字看護大学（守田・石田・亀井・織方・渋澤）；日本赤十字社医療センター（板垣・佐藤・高木）；総合福祉センター（岡本・清水）；乳児院（臼井・福澤）；日本赤十字社助産師学校（芳賀）；日本赤十字社幹部看護師研修センター（大和田・由比・瀬川・江尻）；渋谷区医師会（高橋）；渋谷区（日置）の 19 名で活動を行った。

2) 活動内容

会議を 5 月 24 日、7 月 19 日、10 月 18 日、12 月 20 日、3 月 14 日の 5 回、18 時 30 分～20 時位に開催し、上記目標に基づいて 2 つの班（①防災訓練・イベント班；②広尾地区災害連携マニュアル班）に分かれ活動した。

①防災訓練・イベント班の活動

H29 年度からの課題であった、地域住民参加型イベントの開催と広尾中学校との協働の実施を中心に取り組んだ。5 件の防災訓練・イベントを実施した（表 2）。

防災訓練に関しては、セミナー・防災教育等で協働したことのある住民・中学生が増え、本プロジェクトに対する認知度も高まってきており、地域住民との取り組みが定着しつつある。

住民参加型イベントに関しては、地震の際のサバイバル術をグループワーク形式で話し合った。10 名の参加者アンケートから、全員の高い満足度を得られた。

広尾中学校については、HUG の実施の結果、2 年生 70 名のアンケートから高い満足度を得られた。広尾中学校に合わせた避難所運営シミュレーションとなり、生徒だけでなく、教諭も災害時の役割について認識していた。教諭も徐々に防災教育への関心が高まり、HUG の購入もされたため、少しずつ役割拡大を期待できる。

また、今年度までの活動成果発信のために、第 20 回日本赤十字看護学会（2019 年 6 月 15・16 日）へ演題登録を行った。



写真 1 広尾中学校での防災教育



写真 2 東二丁目アパートへの出張講座

表 2 活動実績

実施日	場所	テーマ等	参加人数
平成 30 年 5 月 27 日 (日) 9:45～12:00	渋谷区立 広尾中学校	渋谷氷川地区合同防災訓練 ①三角巾を使った止血法や固定法訓練 ②AED・心肺蘇生訓練	80 名
平成 30 年 11 月 4 日 (日) 10:00～11:00	広尾ガーデンヒルズ	広尾ガーデンフォレスト・ガーデンヒルズ合 同防災訓練 ①AED 訓練	40 名
平成 30 年 11 月 18 日(日) 9:45～12:00	渋谷区立 広尾中学校	渋谷氷川地区合同防災訓練 ①三角巾を使った止血法や固定法訓練 ②AED・心肺蘇生訓練	500 名
平成 30 年 12 月 6 日 (木) 13:35～15:25	渋谷区立 広尾中学校 (写真 1)	渋谷区立広尾中学校防災教育中学 2 年生対象 HUG	84 名
平成 31 年 2 月 16 日 (土) 10:00～12:00	都営渋谷東 2 丁目アパ ート集会所 (写真 2)	災害時に 1 日生き延びるために ～地震の場合～	17 名

②広尾地区災害連携マニュアル班の活動

H29 年度からの課題であった、「各施設での役割の確認をしつつ、本学が「遺体安置所」としての役割や新たな役割を指定されたのち、改めて、協働すべき施設間で、具体的な連携方法を検討する」に取り組んだ。今年度、本学の遺体安置所の指定が解除となった。これを受けての具体的な連携方法については、検討が進んでいない。

また、今年度までの活動成果発信のために、第 20 回日本赤十字看護学会（2019 年 6 月 15・16 日）へ演題登録を行った。

c. 来年度の課題と展望

1) 防災訓練・イベント班の課題と展望

防災訓練の課題は、訓練の到達目標の明確化・訓練内容・人員（救急法指導員）・方法の決定・物品の経費の検討が必要である。

住民参加型イベントの課題は、参加者は地域住民 10 名と、2017 年度（2018 年 2 月実施セミナーは 1 名）に比べ多くの地域住民の参加が得られたが依然少なく、広報については引き続き検討課題である。高齢者の参加が多いため、音声・文字の大きさ等の改善が課題となった。また、災害時の健康課題についての意見も多く出され盛り上がったことから、災害健康課題への相談ニーズも高そうなのが予測できるため、委員会内の他の部会との連携を図る必要がある。

広尾中学校との協働における課題は、発達障害の生徒への対応方法・今後の長期的な協働のあり方の検討である。

2) 広尾地区災害連携マニュアル班の課題と展望

広尾地区災害連携マニュアル班の課題については、日本赤十字看護大学の遺体安置所指定が解除されたことで、今後の役割について本学防災委員会・協働すべき施設間で協議していく必要がある。

3. なみえプロジェクト

a. 趣旨

2013年に日本赤十字看護大学と日本赤十字社は、福島県いわき市区域に所在する東京電力福島第一原発周辺町村住民への支援のための活動の在り方を検討し、その過程で浪江町から支援要請があった為、この町の避難住民を支援することとした。浪江町は保健師の確保に苦慮していること、いわき市では借り上げ住宅居住であり住民の安否健康状態の把握が難しいという問題を抱えていた。

2013年10月より、日本赤十字社、浪江町から資金の提供を受け、本社看護部と本学が共同で実施した。2017年3月に日本赤十字社からの資金提供が終了し、4月から浪江町と本学が契約を結び、大学単独のプロジェクトとして実施している（図2）。

本プロジェクトでは、町民の生活や経験に耳を傾け、ナラティブ・アプローチに基づく「語りを聞くケア」の実践を行いながら、安否や健康状態の確認を行っている。これらの情報を被災者に関連する組織と情報交換を行いながら連携をとり、支援へと結びつけている。支援を通し、問題を抱えて生きる被災者が相談し、また方策を検討できるよう図っている。目的は、いわき市に避難した全浪江町民を対象として、健康と安否を確認し、関連組織と情報共有をして、問題を抱える人達の抽出と必要な支援をつなげることである。



日赤浪江保健室の外観



家庭訪問の様子

b. 活動内容

1) 運営

いわき市における運営拠点は、浪江交流館２階の「日赤なみえ保健室」であり、保健師３名、看護師２名、事務職１名の非常勤職員を雇用し配置した。家庭訪問の他に、電話での聞き取り、チラシの配布などを行っている。大学での保健室での会議、浪江町との会議の３つの会議をもち、意見および情報交換を行った。大学での会議は事業運営の検討が目的である。担当教職員が３ヵ月に１回、訪問状況などの活動状況、予算執行状況等を協議した。

保健室での会議は、いわき市に避難する浪江住民の健康状況の周知とフォローアップが目的である。浪江町保健師、担当保健所である村福島県心のケアセンターの看護師、浪江町いわき市担当職員、大学会議を実施した。

浪江町との会議は、事業全体の検討で、二本松市にある浪江町仮設役場および浪江町に戻った町役場で保健福祉課と事業内容の確認を行った。

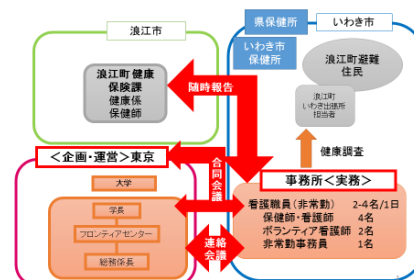


図 2 組織図

2) 活動

今年度は、健康調査とフォローアップの継続訪問を実施した。2018年4月～2019年3月までの実績は、家庭訪問 288 戸／382 件、電話による調査 606 戸／606 人、電話での応答なし(拒否・対象外)142 戸/121 人、調査合計は 1,036 戸/1,109 人であった(表 3)。このうちフォローとなったケースは 109 名であった(表 4)。

表 3 2018 年 4 月～2019 年 3 月までの調査

戸数(戸)					人数(人)				
訪問	電話	拒否	対象外	調査合計	訪問	電話	拒否	対象外	調査合計
288	606	124	18	1036	382	606	103	18	1109

表 4 フォローとなったケース(人)

メンタル	精神疾患	生活習慣病	知的障害 身体障害	病身 気、不調 健康	発達障害	子育て	家族関係	経済不安	アルコール	就労
6	16	5	6	18	28	12	1	1	14	2

c. 来年度の課題と展望

避難指示解除準備区域及び居住制限区域については、平成 29 年 3 月 1 日に避難指示が解除され、4 月より浪江町の帰還困難地域以外の帰還が可能となった。これにより、浪江町は役場を二本松市から浪江町に移した。しかし、浪江町に居住しているのは 633 世帯(2019/3/31)であり、浪江町民の 9.2%に過ぎない。反面、いわき市への浪江町民の移動は微増ではあるが増えており、県内では最も多い 3,243 人(2019/3/31)である。帰還が可能になっても住民の居住地に変化がなく、浪江町行政の困難は続いている。来年度も現状の事業内容で継続支援を行う予定である。

4. 和歌山県湯浅町学校防災プロジェクト

a. 趣旨

平成 30 年 5 月、和歌山県湯浅町、早稲田大学人間科学学術院、本学の 3 者で、教育・研究・学生交流に関する協定を締結した。

この協定は、「学校防災プロジェクト」として防災教育プログラムの開発を実施することに関し、教育活動や研究、学生交流などの各分野において相互に連携および協力することを目的としている。

b. 活動内容

8 月 25 日(土)、湯浅町役場にて、「防災プロジェクト 2018」を開催、中学生を中心に教員、保育所関係者や住民ら約 150 人が参加して行われた。引き続き、次年度も 9 月に「防災プロジェクト 2019」を開催予定である。



C. 継続教育部門

1. フロンティアセミナー部会

a. フロンティアセミナーの趣旨

本部会は、年1回開催しているフロンティアセミナーの企画、運営を担当する部会で、教員3名（本年度のみ、年度途中より1名過員し4名）と事務職員1名により構成されている。フロンティアセミナーは、看護大学・大学院が持つ教育的機能を活用した人材育成の提案、大学と病院の協働、臨床実践能力の向上にむけたプログラムの提供など、看護におけるタイムリーな内容を発信、提起する場として、2006（平成18）年度より年1回開催してきた（初年度である2006年度のみ3回開催）。本セミナーは、日本赤十字看護大学同窓会から支援をうけていた（2018年度にて終了）が、対象者を本学卒業生・修了生に限ることなく、希望者は誰でも受講可能としている。

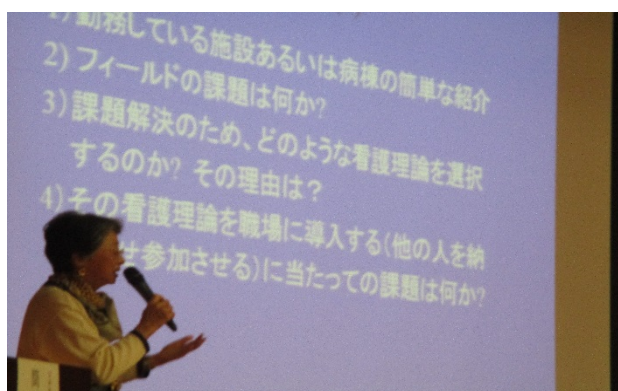
b. フロンティアセミナー活動内容

本年度は、昨年度の受講者を対象としたアンケート調査結果にあった「看護を‘経験’だけで伝えることができない不安」と自由記載から着想し、本学の筒井真優美名誉教授による講演「理論を看護実践にどのように活かすか」を企画、2019年3月21日（13:30～15:30）に開催した。本年度の受講者数は、総数234名であった。なお、過去5年間の受講者数を、表5に示している。

本年度のセミナーにおける講義は、「看護学とは何か」「看護実践の目的は何か」から始まり「実践における具体的な課題の分析と理論の活用」までを、具体例を交え、一方的な講義ではなく受講生への問いかけや討議も交えた形式で進められ、広い会場が一体化して看護理論や日頃の実践について考えることができる、刺激的で充実したセミナーとなった。

表5 過去5年間のフロンティアセミナー受講者数推移

年度	2014（平成26）	2015（平成27）	2016（平成28）	2017（平成29）	2018（平成30）
受講者数	130	70	216	45	234



〈 筒井真優美先生のご講演 「理論を看護実践にどのように活かすか」 〉

本セミナーは同窓会の支援を受けた事業であり、当日のセミナー受講者のうち117名が本学卒業・修了生、在学生であったため、急遽、セミナー終了後に卒業生・修了生の希望者を対象とした茶話会を開催した。茶話会では筒井真優美先生を囲み、27名の参加者が近況報告や、本日のセミナーの感想を語り合うなどして、穏やかな一時を過ごした。



〈筒井真優美先生を囲んでの卒業生・修了生の茶話会の様子〉

c. 来年度の課題と展望

2018 年～2019 年度は臨床の看護職者を対象とした「看護理論」「看護研究」をテーマとしたセミナーを計画しており、2019 年度のフロンティアセミナーは「チャレンジ，看護研究！」（仮題）を 11 月 2 日に開催予定である。2019 年 4 月以降、本セミナー開催に向けて準備を行っていく必要がある。併せて、2020 年度以降のセミナーのテーマの企画立案を行う。

今後の展望としては、地域連携フロンティアセンターが実施している他のプログラム（例えば、実習指導者研修会、ホームカミング・デー等）とのコラボレーションなど、より効果的で効率的なセミナーの運営に向けて、様々な模索をしていくことも重要である。

2. 認定看護師スキルアップ研修部会

a. 趣旨

本部会は、年に 1 回開催している「認定看護師のためのスキルアップセミナー」（以下、認定看護師セミナー）の企画及び運営の担う部会で、教員 4 名と事務職員 1 名により構成されている。認定看護師セミナーは、本学地域連携・フロンティアセンターが開講していた認定看護師教育課程（2014 年より休止中）の修了生のフォローアップを目的として、2015（平成 27）年度より開催されている。当初は、糖尿病看護」「慢性呼吸器疾患看護」「認知症看護」の 3 コースに限定したプログラムであったが、本学の教育課程修了生に限定せず、受講希望者全てを受け入れてきた。2017（平成 29）年度からは、認定看護師の全領域コースの修了生に対応できるプログラムを工夫し、さらに、門戸を広く開放している。

b. 活動内容

本年度は 2019 年 2 月 23 日に、認定看護師セミナーを開催した。受講者数は表 6 に示す通りである。

昨年度に課題としてあげていた「認定看護師として個々にアイデンティティを持ち、生き生きと活躍する、ということを支持するセミナーを目指す」ということを目標として、企画・準備をすすめた。本年度の認定看護師スキルアップセミナーの当日のプログラムは表 7 に示す通りである。

セミナーの企画・運営にあたっては、前年度の課題であった「セミナーにおける認定看護師自身の発言が活発ではない」に配慮し、認定看護師の方々にトークセッションの司会者、パネルディスカッションのパネラーの役割を担っていただき、ディスカッションの活性化をはかった。また、前年度の課題の「プログラム全体が座学で認定看護師が主体的に学ぶ場となっていない」に対しては、2018 年度から 2019 年度までの 2 年間の試みとして、公募企画ワークショップの枠を設け、受講生による自発的なブ

プログラムの企画開催を導入した。2018 年度は試みの初年度であるため、認定看護師スキルアップセミナー部会が円滑に運営できるように支持的、教育的にかかわりフォローを行った。2018 年度に実施されたワークショップは、3 件であった。

表 6 認定看護師スキルアップセミナー受講者数推移 (単位：人)

年度	2015 (平成 27)	2016 (平成 28)	2017 (平成 29)	2018 (平成 30)
受講者数	289 (170)	322 (225)	414 (214)	338 (134)

*受講者数(カッコ)内は本学修了生の人数



〈トークセッション〉



〈パネルディスカッション〉

表 7 2018 (平成 30) 年度認定看護師のためのスキルアップセミナー プログラム

10:00～11:00	トークセッション「認定看護師のアイデンティティを揺るがすもの」 ファシリテーター：川嶋みどり、高田早苗（日本赤十字看護大学）			
11:10～12:20	パネルディスカッション 「今、改めて問い直そう ―認定看護師に期待されていること、できること―」 司 会：佐々木幾美（日本赤十字看護大学） パネラー：川嶋みどり（日本赤十字看護大学） 江見 香月（日本赤十字看護大学） 村田 中（武蔵野赤十字病院）			
13:30～14:30	特別講演「認知症の人を知り、共に生きる」太田喜久子（日本赤十字看護大学）			
15:00～16:20	講義※1	特別セミナー※2	公募企画ワークショップ	
			1※3	2※4
				3※5

(敬称略)

※1「人から人、そして地域へ」高木あけみ（原町赤十字病院）

※2「高齢者の睡眠の特徴と睡眠マネジメント」臼杵礼司（東洋羽毛）

※3「歩くことを支える看護の力 -足に関する基礎知識とケア-」伊藤麻紀（日本赤十字医療センター）

※4「糖尿病認定看護師として考える地域への実践・指導・相談」久松香（岐阜赤十字病院）ほか

※5「呼吸器に関連した特定行為研修についてどう対応するか」

赤井香織（JR 長野厚生連南長野医療センター篠ノ井総合病院）ほか

c. 来年度の課題と展望

日本看護協会が認定看護師制度移行に関する具体的内容を公式発表したことも影響し、2018 年度受講生は 2017 年度受講生よりも受講者数は減少した。しかし、依然として受講者数は 336 名と多く、本年度は本学修了生以外の受講者数が 55%と過半数を超えている。つまり、社会貢献という見地からも十分にその意義が評価できるセミナーといえる。

今回の認定看護師セミナー（2020 年 2 月 29 日に開催予定）にむけての検討課題及び今後の展望について、以下に述べる。

2018 年度は公募企画のワークショップは 3 つのみで、開催希望者、開催される領域コースともに少なかったため、当該認定コースのワークショップがない受講者に対応すべく「講義」と「特別セミナー」を企画した。開催されたワークショップについては、企画者及び参加者から概ね好評であったが、次年度もワークショップの公募が少ない場合、本年度と同様のプログラムの場合、企画者がいないコースの受講者に対応するためのプログラムを準備しなければならないことが予測される。以上のことから、来年度の課題として、「課題① セミナーのプログラム全般の見直しと、2020 年度のプログラムの企画立案・円滑な運営」があげられる。

今後の展望として、本セミナー開催の継続については、日本看護協会の認定看護師制度に関する動向を見ながら引き続き検討していく必要がある。現在は、全ての認定看護師を対象としたプログラムを提供しているが、ワークショップ（領域コース数含む）が増加しない場合、多様なコースに対応し続けることは極めて困難である。受講者の領域コースの制限や、受講者を本学修了生のみとする、といった対処の検討も併せて行うことが必要と考える。このような見地から、来年度の課題として「課題② ワークショップを導入した本年度、2019 年度の認定看護師セミナーにおける受講生の動向ならびに、2018 年度の受講者アンケートの結果を分析・評価し、2020 年度以降の認定看護師セミナーの運営方針に関する方向性を打ち出していく」ことがあげられる。

3. 実習指導者研修部会

a. 目的

- 1) 本学での看護学教育における実習の意義および実習指導者としての役割を理解し、効果的な実習指導につなげる。
- 2) 大学教員や自施設以外の実習指導者との情報交換の場とし、看護者としての視野を広げ自己成長の機会とする。
- 3) 実習での「ケアし、ケアされる」という体験を通して、学生が 4 年間にわたり成長していけるような指導体積を構築する。

b. 運営の基本方針

- 1) 本学と実習施設が協働し、企画運営を行う。
- 2) 受講生が、本学教員や自施設以外に勤務する受講生と情報交換できる場を提供する。
- 3) 受講生が‘人を育てる’観を育める場を提供する。
- 4) 受講生には、研修修了時に「日本赤十字看護大学 実習指導者研修会 修了証」を発行する。

c. 活動内容

1) 企画および運営

本研修会は、本センターの研修部門に位置付く実習指導者研修部会を構成する教員 11 名（学内企画委員）が中心となり、学外企画委員として日本赤十字社医療センター、武蔵野赤十字病院、大森赤十字病院、葛飾赤十字産院、横浜市立みなと赤十字病院に所属する看護職者（各施設 1 名、合

計 5 名) と協働で開催した。

平成 30 年度は実習指導者研修部会の学内・学外企画会議 3 回を開催し、内容の充実を求め企画・運営を行った。事務作業については、地域連携・フロンティアセンターを担当する本学事務職員が、様々な作業を担い、研修会の円滑な運営を支援した。

今年度の実習指導者研修会は、例年同様に開催期間は 6 月～1 月とし、開催回数は 5 回、研修会の構成は実習指導に関する理論・演習・リフレクションとした。

今年度は、昨年度とほぼ同様の内容を企画したが、台風により一部中止せざるを得ない状況となった為、内容を一部短縮、変更した。以下の点が変更している内容および企画である。

- ・ 2 回目プログラムは「実習指導の実際①」および「実習指導の実際② (演習 I - 2)」の一部のみ実施。
- ・ 3 回目は、「実習指導の実際②」のみ実施。
- ・ 4 回目は、3 回目に予定していた「教育心理ー学習者の心理ー」を実施、「実習指導のリフレクション」は 1 時間に短縮。
- ・ 5 回目は、3 回目に予定していた「教育原理ー教育原理と実習指導ー」、「対人関係論ープロセスレコードを用いてー」、「リフレクションの概念と実際」を実施し、「実習指導の実際② (演習 II)」を短縮。

2) 実習指導者研修会プログラム

開催月日	時間	プログラムの内容	講師
平成 30 年 6 月 20 日 (水) 受付開始: 8 : 30	9:10-9:30	開校式／オリエンテーション	
	9:30-10:30	教育課程と実習の位置づけ 教育カリキュラムと実習の位置づけ	企画委員
	10:40-12:10	実習指導概論 実習指導の展開と実習指導者の役割、実習指導の過程・方法	西田朋子先生 本学 准教授
	13:20-15:50	教育方法 ー状況に埋め込まれた学習ー 状況的学習論、正統的周辺参加論	有元典文先生 横浜国立大学 教授
	16:00-16:20	オリエンテーション	
8 月 8 日 (火)	9:30-12:00	実習指導の実際① (演習 I - 1) Group Work にて、実習指導案を作成する	企画委員 実習担当教員
8 月 9 日 (水)	14:00-16:00	実習指導の実際② (演習 I - 2) Group Work にて、実習指導案を作成する	企画委員 実習担当教員
8 月～11 月	実習指導に関する実習 (実習指導案を用いた展開) *申し込みをされた方は、他施設にて実習指導の見学 (オプション 1)		
11 月 27 日 (火) 受付開始:	9:30-10:30	実習指導者としての目標と結果・評価 Group Work にて、実習指導についての振り返りを共有する	企画委員 実習担当教員
	10:40-12:00	教育心理 ー学習者の心理ー 人間の発達、学習過程における心理、学生の特性	遠藤公久先生 本学 教授

9:00 ガイダンス 9:20 講義室 301	13:00-14:20	看護とケアリング 看護の概念、ケアリング	守田美奈子先生 本学 教授
	14:30-15:50	看護倫理 看護と倫理、実習指導と倫理	高田早苗先生 本学 教授
	16:00-16:30	オリエンテーション（次回の研修に向けて）	企画委員 実習担当教員
平成 31 年 1 月 29 日 (火) 受付開始: 8:30 ガイダンス 8:50 講義室 301	9:00-10:20	教育原理 ー教育原理と実習指導ー 教育の意義、目的、教育活動の特性、人を育てる(教育)観	望月厚志先生 茨城大学 教授
	10:30-11:50	リフレクションの概念と実際	佐々木幾美先生 本学 教授
	13:00-14:20	対人関係論ープロセスレコードを用いてー	小宮敬子先生 本学 教授
	14:30-16:00	実習指導の実際②（演習Ⅱ） Group Work にて、立案した実習指導案を用いて振り返りを行い、 実際の実習指導で得た学びを深める	企画委員 実習担当教員
	16:10-16:40	修了式・閉講式	

3) 受講者の構成と受講者数

本学の実習指導を担っている病産院・高齢者施設に勤務する看護職者とそれ以外の病院に勤務する看護職者、合計 70 名で研修会を開始した。

4) 全 5 回の研修会の概要とアンケート結果

■第 1 回：平成 30 年 6 月 20 日（水）

開校式に続き、①教育課程と実習の位置づけについて企画委員より説明があった後、②実習指導概論、③教育方法についての講義が行われた。

①教育過程と実習の位置づけ：本学が教育理念と教育目標をもとに、講義・演習・実習の有機的な結びつきに取り組んでいること、各学年で体験する実習での反応そして実習指導者と大学教員の連携の重要性について説明し、受講生に理解を得た。

②実習指導概論：今年度は、研修初日に設定され、「日本赤十字看護大学の教育課程と実習の位置づけ」の講義に続いて行われた。この講義が、初日であったことで、研修全体の導入にもなった。講義ではまず、実習の位置づけと意義について、そして看護学実習における実習指導者の役割について学んだ。具体的にわかりやすく講義していただき、受講生は学生の置かれた状況を想像したり、これまでの実習指導場面を思い起こし、照らし合わせながら理解を進めることができた。最後に、指導者と教員の役割と連携についても触れ、それぞれの役割の違いを理解することで連携の大切さも学ぶことができた。

③教育方法-状況に埋め込まれた学習-：有元典文教授による講義目的は、「誰もが発達する実習指導について全員で体験的に感じる・考える・今後活かす」であった。研修生のアンケートでは、体験を通して学生の気持ちを考えることができたなど参加型の研修で、研修生が体験を通して学んだことが伺える。実際講義では、「学習は初めてのことに挑戦することであり、そのためにはリス

クが伴うこと」を様々な演習の中で体得することができていた。そして、参加型の講義のためか研修生は当初緊張していたが、結果的には「楽しかった」「面白かった」「他の研修生と交流することが出来た」など、緊張もほぐれ学びを深めていた。これは、講師の有元先生自身が安心して学習できる場を提供していたからこそだと考える。また、午後の時間の体験型の研修は、研修生が集中して学習することができていた。

■第2回：平成30年8月8日（火）

台風の影響で、研修時間が午前のみとなったため、開始時間を早め9時半より、①実習指導の実際（演習I-1）のみの開講となった。台風が直撃した日であったが、時間を早め、短縮したことで、研修生は全員参加できた。内容はまず、企画委員より実習指導案作成のための講義を行った。研修後のアンケートでは、突然の変更であったにもかかわらず、プログラムに関して、よかったととてもよかったで、71%であり、資料も分かりやすく、口頭での説明にて、さらに理解が深まったとの評価であった。講義後、自施設での実習受け入れ状況について、グループワークを行い、自施設の状況を明確化できたことは、翌日実施された実習指導案作成のためのグループワークにもいかせる内容であったと考える。

■第3回：平成30年8月9日（水）

専門領域別に、4～6名のグループに分かれ、事例をもとに実習指導案における週案あるいは日案の作成に取り組んだ。また、各グループに学内・学外企画委員と実習担当教員がファシリテーターとして参加した。今回は、台風の影響により例年に比べ短縮した時間でのグループワークとなったが、事例を通して実習中の学生の様子や反応をファシリテーターから聞きながら、指導方法について話し合い、指導案作成のポイントを学ぶことができたと考える。

■第4回：平成30年11月27日（火）

8月以降は、実際に指導案を立案して実習指導に取り組む状況になっている。また、台風の影響で延期となった講義を行う必要があった。そのため、11月の本講習会では演習として、①実習指導者としての目標と結果・評価、講義として②教育心理、③看護とケアリング、④看護倫理を企画した。

①実習指導者としての目標と結果・評価：8月の研修後より、各施設において実習指導者として目標を立て学生と関わり、その結果と評価を持参してのグループワークとした。この単元は、本来、教育心理や対人関係などの講義を受け、その学びを活かした実習指導の経験を共有する予定だったが、台風の影響によりやむなく内容を縮小した経緯があった。しかしながら、研修生たちは積極的に実習指導者として、臨床実習に関わっており、学生が希望する患者やケアをなるべく経験できるように配慮したり、ここで実習できて良かったと思えるような指導体制の整備などを行っていた。また、共通の話題としては、部署のスタッフたちへの実習内容の理解の浸透が多く聞かれていた。1時間と短い時間ではあったが、グループで十分内容を共有できたと考える。

②教育心理：教育心理学の講義は、現代青年の特徴および学びの心理について遠藤公久先生より講義を受けた。講義に参加した研修生は、教育心理学について学ぶ機会が少ないため興味深く受講している様子が見られた。アンケートの結果からも約52名（86%）が、良かった・とても良かったと答えており有意義な講義であった。特に現代青年の心理構造が教育社会背景の影響からどのように形成されたかについてや学びの特徴、ADHDや学習障害を抱えた青年への対応について学べた。内容豊富な講義であったが、講義時間が短縮されたため受講生の中には講義をもう少し聞きた

かったという意見もみられ、講義時間の検討は必要と考えられる。

- ④看護とケアリング：臨床指導者研修会の一環として「ケアリング」の講義を日本赤十字看護大学の守田先生によって行われた。講義の内容は、ケアリングに注目する理由や概念の発展、看護実践とケアリング能力についてや能力をはぐくむための教育課題について講義された。講義の形式は、先生からの問いに対し少人数によるグループワークを取り入れていた。講義内容に対しては、55人（90%）が「とても良かった・良かった」とアンケート結果であった。ケアリングの概念の理解することは、実践を通して自らが成長し、そしてチーム全体でケアリングを価値づけし、病棟文化として形成する事につながる。さらに実習生が実習という経験学習の場でケアを通して知識や技術を獲得できるような関わりを持ち、その関わりを通して自分自身も成長することにつながることを学べた。」

- ④看護倫理：「看護倫理」の講義は、講師の高田先生からの問いかけに研修生が意見を出し合うという形で進められた。「看護倫理とは何か」という問いから始まったが、なかなか研修生から積極的に意見が出なかった。しかし、多くの研修生が自分のなかでこの問いに対して思考を巡らせている様子が伺えた。その後の問いに対しても、活発な意見交換といえるまでには至らなかったが、研修生から出された意見に対し、高田先生が助言や考えを述べてくださり、各研修生は自分ならどうか、自分の職場ではどうかと自己の倫理的課題と結びつけて考えている様子が伺えた。アンケート結果からも、緊張感がありながら、倫理について考えることができたという高い評価の意見が多くあげられていた。また、実習生の問いへの対応についての高田先生の考えを聞き、日頃の悩みが解消されたり、学生に対する姿勢や自己の看護について振り返り、前向きに取り組む機会となったといった意見も多く、高田先生の熱意を感じ、心に響く講義となった。

■第5回：平成31年1月29日（火）

最終回であったが、台風で延期になった3つの講義と企画委員が担当した演習による実習指導の総まとめが行われた。

- ①教育原理：教育原理については、茨城大学の望月厚志先生から講義を頂いた。研修生は事前に課題図書の手引きがあり、研修生はそれを読んで頂き講義に参加した。研修生は従来の系統的な知識の積み上げによる学習や経験型学習について、ドラマやディズニー映画のシーンを題材にした講義は「大変わかりやすかった」「教育の方法や概念が映像を用いてわかりやすく学べた」などの感想があった。成人教育学のアンドラゴジー、ペタゴジー、デューイの経験論、ショーンの省察など、様々な概念を通して学ぶことができた。一方的に教わるだけではなく、いかに自発的な探究心を高めていくことにつなげていくか、これらの概念、理論を生かしながら実習指導を展開していく必要性を学ぶことができた。講義の内容が充実していたが、配布資料が多かったという感想もあり今後の課題として対応したい。
- ②リフレクションの概念と実際：「リフレクションの概念と実際」では、佐々木幾美先生から講義を頂いた。リフレクティブに経験を振り返る、その思考のプロセスに着目し、自分自身の経験や知識のみならず、感情や思考、行動についても深く考えるという、リフレクションの概念や特徴、リフレクションと対話の必要性が説明された。学生が実習という経験を通して学ぶ際、リフレクションと他者との対話を促すことで学習が促進されることが、具体的な実習場面を例に挙げて説明された。さらに新人教育場面に触れる内容もあり、受講者は学生や新人という後輩育成に活用できるという示唆が得られた様子であった。受講者の95%以上が「よかった」と回答し、「活用したい」との感想が多数聞かれており、受講者の理解が進んだことが伺える。

③対人関係論：「対人関係論－プロセスレコードを用いて」と題して、日本赤十字看護大学小宮敬子教授より講義された。受講者は、実習における学生の心理状態、実習で目指すことは何かなどを、ミニワークを用いて考え、プロセスレコードについて、その成り立ちや種類、使用方法などを、説明だけではなくロールプレイを用いて理解することができている。受講者がロールプレイの演者となり、視覚的にも情報が入ったため、「理解できた」「わかりやすかった」という意見が多かった。

講義を通して、「実習中だけでなく、普段の看護業務にも活用していきたい」や、対話により学生はもちろん、「自分自身の気持ちを振り返る」「自分の感情の動きを把握する」ことの大切さを認識した受講生が多くみられている。

④実習指導の実際②（演習Ⅱ）：5～6名、計13グループとなり、立案した実習指導案を用いた振り返りを行い、実際の指導で得た学びを深めることをねらいとしたグループワークを行った。ワークでは活発に意見交換が行われていた。実際の指導者実践を行っていない受講者もいたが、他者の発表を聞いて参考にしている様子が伺えた。アンケートからも、他施設での実習指導体制や工夫している点など、情報交換の場として有意義であると考ええる。一方、研修会でのこれまでの講義内容と照らし合わせた振り返りには至っておらず、受講者自身が何を話せばよいか戸惑っている様子もみられた。台風の影響で研修日程に変更が生じたこともあり、本演習までの実習指導場面において研修で得た知識を活かす機会がなかったことが考えられる。演習内容および方法やファシリテートについて検討が必要と考える。

c. 来年度の課題と展望

学生の実習における学びの充実と実習指導者への支援を目指し、この実習指導者研修会の開催が4年目となった。本年度は台風の上陸に伴い、8月の2日間のプログラムを変更し実施することになった。講師の先生方と調整し実施することができなかった講義をすべて行うことができたが。一部、演習は短縮せざる得ない状況が生じた。そのため、次年度も同様の事態が生じる可能性も考え、受講生への連絡体制やプログラム変更の可能性を事前に想定しておく必要がある。

また、今まで研修参加費は実質を反映した形で設定をしていなかったため、実際の諸費用（外部講師謝金、印刷費）を計算し、次年度からは参加費を改定し実施することとした。

更に次年度は、本学の講師が退職等で変更になることから、全面的にプログラムを見直し、新しい講義内容も取り入れながら、受講生のアンケート結果も参考にし、よりニーズを反映した研修会を目指す予定である。

D. 実践研究部門

1. ケアリング・フロンティア広尾

1) リサーチ・フェスタ

a. 趣旨

赤十字リサーチ・フェスタは、赤十字系列の医療・福祉施設を中心に連携し、研究や教育の質を高め、より良い実践を行っていくことを目指したもので、今回で 6 回目の開催である。昨年度より、参加する施設間の連携を強め、さらに多くの参加者との活発な交流を促進することを目的に、日本赤十字社医療センター研究推進プロジェクトチームとの協働のもと、日本赤十字社医療センター「冬の院内看護研究発表会」の一部と合同開催として実施した。

b. 活動内容

平成 31 年 1 月 28 日（月）17 時 30 分～19 時 30 分に日本赤十字看護大学広尾ホールにおいて、赤十字リサーチ・フェスタを開催した。プログラムとしては例年実施している研究ポスター掲示、研究よろず相談、リサーチカフェなどに加え、日本赤十字社医療センター「冬の院内看護研究発表会」参加のポスター発表（示説）とともに本学で昨年度海外研修活動助成を受けた研究 4 演題も発表を行った。また、今年度の研究ミニレクチャーは、「臨床から研究へ」をテーマに、日ごろの実践で感じた疑問をいかに研究へつなげるかを考える内容となっており、多様な方法で看護研究に接する機会となった。

今年度は、日本赤十字社医療センター及び日本赤十字看護大学内にプログラムを事前配布したり、隣の赤十字施設などへチラシを送付するなど、広く広報を行った。当日の参加者は、日本赤十字社医療センター、日本赤十字看護大学、日本赤十字社幹部看護師研修センターなどから、看護職、教員、大学院生など 106 名であり、昨年より 27 名増加となった。当日の発表演題は「冬の院内看護研究発表会」参加のポスター発表（示説）5 演題、ポスター展示及び日本赤十字看護大学助成金による奨励研究やケアリング・フロンティア広尾の活動報告 29 演題、合計 34 演題であった。

今回は会場内の間仕切りをなくし、「冬の院内看護研究発表会」参加のポスター発表（示説）のエリア、研究ミニレクチャーのエリア、ポスター展示と研究よろず相談・リサーチカフェのエリアと参加者は関心があるところを自由に回ることができるよう工夫した。その結果、ミニレクチャー後に日ごろの疑問を研究へつなげるため、研究よろず相談を活用して研究の実現可能性を相談したり、関心ある演題の発表参加への移行が円滑に行われた。

c. 来年度の課題と展望

来年度はより相互交流を促進するためのプログラムの検討や進行方法の工夫を行い、さらには広い参加者が看護研究に関心を高め、臨床実践の即した研究へつなげられる場としていきたい。



1) 赤十字リサーチ・フェスタ

年度	平成 30 年度 報告書
リーダー	新田真弓
メンバー	リサーチ・フェスタ部会：江見香月、細井美沙子、塚本恵弥、研究推進委員会 日本赤十字社医療センター研究推進プロジェクト
ねらい	赤十字リサーチ・フェスタは、赤十字系列の医療・福祉施設を中心に連携し、研究や教育の質を高め、より良い実践を行っていくことを目指す。
今年度の報告 (概要)	平成 31 年 1 月 28 日 (月) 17 時 30 分～19 時 30 分に日本赤十字看護大学広尾ホールにおいて、赤十字リサーチ・フェスタを開催した。プログラムとしては例年実施している研究ポスター掲示、研究よろず相談、リサーチカフェなどに加え、日本赤十字社医療センター「冬の院内看護研究発表会」参加のポスター発表(示説)とともに本学で昨年度海外研修活動助成を受けた研究も発表を行い、合計 34 演題の研究紹介を行った。 また、今年度の研究ミニレクチャーは、「臨床から研究へ」をテーマに、日ごろの実践で感じた疑問をいかに研究へつなげるかを考える内容となっており、多様な方法で看護研究に接する機会となった。 当日の参加者は、日本赤十字社医療センター、日本赤十字看護大学、日本赤十字社幹部看護師研修センターなどから、看護職、教員、大学院生など 106 名であり、昨年より 27 名増加となった。 今回は会場内の間仕切りをなくし、「冬の院内看護研究発表会」参加のポスター発表(示説)のエリア、研究ミニレクチャーのエリア、ポスター展示と研究よろず相談・リサーチカフェのエリアと参加者は関心があるところを自由に回ることができるよう工夫した結果、研究よろず相談の利用や、関心ある演題の発表参加への移行が円滑に行われた。
次年度の予定 (概要)	次年度も、同時期に日本赤十字社医療センター「冬の院内看護研究発表会」との合同開催にて実施する予定である。

2) “最期まで自分らしく生きる”プロジェクト

年度	平成 30 年度 報告書				
リーダー	坂口 千鶴				
メンバー	川上潤子・元田敦子・及川咲・芝山真沙美（医療センター）、岡本薫・松本邦子（総合福祉センター）、坂口千鶴・千葉京子・清田明美・江見香月・渡邊しのぶ（看護大学老年看護学領域）、比留間絵美（博士後期課程）、三好恵美・佐々木舞子（修士課程）				
ねらい	地域に暮らす高齢者が最期まで自分らしく生きることを支えるために、家族の思いも踏まえながら、フォーマル、インフォーマルの関係性をもとに広尾地区という地域の中でのソーシャル・サポート・ネットワークを構築していく。				
今年度の報告 （概要）	① 高齢者看護コース「最期までその人らしく生きることを支えるケア」 平成 26 年度からの活動をもとに、平成 30 年度「高齢者看護コース：最期までその人らしく生きることを支えるケア」について全 5 回のコースを、医療センター、総合福祉センター、広尾地区等の病院、施設、訪問看護ステーションの看護師を対象に実施した。				
	回数	日程	場所	内容	参加者数
	第 1 回	9/21（金）	日本赤十字看護大学	講演会/オリエンテーション	26 名
	第 2 回	11/30（金）	日本赤十字看護大学	事例検討会（グループワーク）	25 名
	第 3 回	1/25（金）	日本赤十字看護大学	事例検討会（グループワーク）	19 名
	第 4 回	2/ 8（金）	日本赤十字看護大学	講演会	24 名
	第 5 回	3/15（金）	日本赤十字看護大学	事例発表会	
	② 広尾コンソーシアム「最期まで自分らしく生きるとは？」 平成 26 年度からの活動をもとに、広尾地区で生活する人々が交流を通して最期まで自分らしく生きるとは何か、そのためには何が必要なのかを考える機会を、下記のとおり設けた。				
	回数	日程	場所	テーマ	参加者数
	第 1 回	9/14(金)	日本赤十字看護大学	最期まで自分らしく生きるとは	8/14 名
第 2 回	10/5(金)	総合福祉センター	私は私の人生を歩んでいく	5/13 名	
第 3 回	12/10(月)	医療センター	治療を受けながら自分らしく生きるとは	4/10 名	
第 4 回	12/20(木)	広尾ガーデンヒルズ	高齢社会を乗り切るために	16/21 名	
第 5 回	2/8(金)	日本赤十字看護大学	意思を確認できない高齢の親を支えて	3/24 名	
次年度の予定 （概要）	平成 31 年度も引き続き、医療センター、総合福祉センター、広尾地区等の病院、施設、訪問看護ステーションと拡大して参加者を募り、今年度同様に全 5 回の高齢者看護コースを開催し、修了書の発行、希望する人にはレポートに関する指導も行っていく予定である。また、広尾地区の住民を対象に「最期まで自分らしく生きるとは」をテーマに、日本赤十字大学、医療センター、総合福祉センター、ガーデンヒルズ、他大学（聖心女子大学等々）でコンソーシアムを形成し、5 回程度のセミナーをコースとして行っていく予定である。				

3) UNICEF/WHO 母乳育児支援 20 時間コース基礎セミナー

年度	平成 30 年度 報告書
リーダー	日本赤十字社医療センター NICU 看護師長 廣瀬孝子
メンバー	日本赤十字社医療センター：川井由美子、大野芳江、中村志津佳、趙嬉瑛、中根直子 日本赤十字看護大学：井村真澄
ねらい	赤ちゃんにやさしい病院運動（Baby-Friendly Hospital Initiative）における母乳育児を保護・支援・推進できる病院スタッフの知識、技術、態度を育成する。 母親と赤ちゃんにやさしいケアを提供できるためには、スタッフ同士がやさしくサポートし合える関係を体験し、築くことが重要である。会においてはスタッフ同士のコミュニケーション能力やエモーショナルサポート能力、ピアサポート能力も育成する。 病院と教育機関が連携することで、参加者へケアについてのより高い知識と技術を提供することが可能になり、参加者のケアをうける母親へ個別性のあるケアの提供につながると考えられる。
今年度の報告 (概要)	日程：7 月 29 日（日）、8 月 11 日（土）、9 月 2 日（日） 各 9:00～17:00 場所：日赤医療センター 5 階 MF ホール 参加者：日赤医療センター 助産師 15 名。参加者の部署は周産期だけでなく、小児科病棟、婦人科病棟に勤務する助産師が参加することができた。 ゲスト講師（敬称略）：医師：笠井、木戸、中尾、杉本 薬剤師：小林 助産師：中根、坂上 内容：開催に向けて事前会議を数回実施し、各回の内容検討、担当講義、講師依頼、単位の申請などを行った。セミナー第 2 回目では、「母親への授乳支援」という実習があったが、医療センター 5 B 病棟に入院中の母親や病棟スタッフの協力を得て実施することができた。毎回のコース前にブリーフィングをし、コース終了後のアンケートをもとにデブリーフィングを行った。アンケートでは、毎回、母乳栄養に関する基礎的なことを、医療センターで実施しているケアと合わせて聞くことで、学びが多かったという意見がほとんどであった。 毎年、乳がんに関するトピックを講義として入れる予定を組んでいるが、今回も日程がタイトであり入れることができなかった。次年度再検討したい。
次年度の予定 (概要)	昨年度と同様に 3 回コースを 1 回/年行っていく予定。ゲスト講師の中に医療センター周産母子・小児センター長を入れ、講義をお願いする。 また、参加者を助産師だけでなく、他部門の職員から広く募って行く予定である。

4) 小児看護研究会 Candy (Children and You)

年度	平成 30 年度 報告書				
リーダー	日本赤十字看護大学 江本リナ				
メンバー	江本リナ、川名るり、山内朋子、鶴巻香奈子、神谷美帆 （日本赤十字看護大学小児看護学） 古川祐子、間所利恵、井出拓也（日本赤十字社医療センター）				
ねらい	子どもと家族にかかわる看護師やその他の専門職者が、実際に臨床場面で対応に困っていること、援助の方向性について悩んでいることについて、事例を通して考えたり、小児看護に関連したテーマについてディスカッションしたりすることを目的に、小児看護研究会を行っている。				
今年度の報告 （概要）	対象	子どもと家族にかかわる看護師、およびその他専門職者			
	参加費	100 円／回 （資料・お茶代として）※年間 500 円を上限とする。			
	会場	日本赤十字看護大学内			
		日時	場所	テーマ	出席者
	第 1 回	5 月 25 日 （金） 13:00～14:30	204 教室	小児一般病棟での子どもの見取りについて（看護師が抱える感情に関する検討）	22 名
	第 2 回	6 月 22 日 （金） 13:00～14:30	204 教室	在宅療養中の子どもの清潔管理を要する医療物品の保管についての事例	18 名
	第 3 回	7 月 27 日 （金） 13:00～14:30	211 教室	小児救急病棟における withhold（治療の差し控え）について	18 名
	第 4 回	9 月 14 日 （金） 13:00～14:30	204 教室	終末期にある子どもへの看護について	14 名
	第 5 回	10 月 12 日 （金） 13:00～14:30	204 教室	母子に関する情報共有のあり方について	14 名
	第 6 回	11 月 30 日 （金） 13:00～14:30	204 教室	ネグレクト傾向にあった骨形成不全症の子どもの就学支援	10 名
	第 7 回	12 月 21 日 （金） 13:00～14:30	204 教室	救急外来を受診した親子のケース	14 名
	第 8 回	2 月 22 日 （金） 13:00～14:30	202 教室	小児看護学博士・修士論文発表会	39 名
次年度の予定 （概要）	次年度も年に 8 回の開催を予定している。				

5) 精神科看護事例セミナー

年度	平成 30 年度 報告書
リーダー	小宮敬子
メンバー	鷹野朋実、松本佳子、堀井湖浪、古城門康子、藤本法子
ねらい	多くの人とさまざまな領域の事例を検討することを通して、多角的な視点を得て、それまでは見えていなかった新たな面を発見してかかわりの糸口を作り、関心や動機づけを高める。看護職同士のサポートと学習の機会とする。
今年度の報告 (概要)	以下の通り、今年度は 7 回第 4 金曜日に、実施した。 第 1 回：4 月 27 日 第 2 回：5 月 25 日 第 3 回：7 月 20 日 第 4 回：9 月 28 日 第 5 回：10 月 26 日 第 6 回：11 月 30 日 第 7 回：1 月 25 日 時間は 18：45～20：30、場所は大学の多目的演習室で行った。 毎回の参加者は 10～20 人で、事例提供者は精神科病棟に勤務するスタッフが大半だったが、訪問看護ステーションのスタッフに事例が増えている傾向があった。 第 8 回を、3 月に予定していたが、学内の行事とぶつかってしまい中止にした。
次年度の予定 (概要)	今年度も、以下の日程で 8 回、事例検討会を行う予定である。 4/26、5/24、7/26、9/27、10/25、11/22、1/24、2/28 時間と場所は、昨年と同様に行う。

6) T R C 研究会

年度	平成 30 年度 報告書
リーダー	守田美奈子
メンバー	加藤ひろみ、関根光枝、渋谷紘子、今井早良（日本赤十字社医療センター） 守田美奈子、本庄恵子、住谷ゆかり、酒井智恵（日本赤十字看護大学）
ねらい	個々の患者に最適な全人的総合的腎不全医療（Total Renal Care）の推進、普及をめざす
今年度の報告 (概要)	1. パンフレット作成し、それを日本赤十字社医療センターでは、院内外の研修に活用している。 2. 科研を受けて実施している看護大学の研究の一環として、アドバンスケアプランニング（ACP）に関する医療者の意識や実践に関するインタビューへのフィールド協力を得て、インタビュー調査を行った。
次年度の予定 (概要)	2 の ACP の研究に関して、インタビュー調査を継続する予定である。

7) セルフケア能力を高める支援の検討会（SCAQ 研究会）

年度	平成 30 年度 報告書
リーダー	加藤ひろみ（日本赤十字社医療センター）
メンバー	古川祐子、横田和子・中根直子・加藤ひろみ・那須照代・池田美里・加藤まこと・スミス美保子・鈴木恵子・渋谷紋子・石井佳代・及川麻衣子・小林千恵・小林章子・矢野京子・萩原夏紀・藤原玲子・北川千夏子・鮎川道恵 （日本赤十字社医療センター） 本庄恵子、田中孝美、和田美也子、桐原あずみ、細井美沙子、工藤有希 （日本赤十字看護大学）
ねらい	入院―外来通院―在宅療養を視野に入れ、一人ひとりの生活を視野に入れたセルフケア支援を展開することをめざす。志を同じくする仲間を募り、広尾地区の赤十字から、セルフケア支援を世の中に向けて発信する。
今年度の報告 （概要）	（１） SCAQ 研究会（月に 1 回 開催）：日本赤十字社医療センターで、月に 1 回 1 時間、研究会を開催し、セルフケア支援を展開する方略を練った。 ★アクション・リサーチ：「セルフケア支援を行う看護師を育成するプロジェクト」を、赤十字助成金の助成を受けて実施している。 （２） 事例検討・活動検討：H30 年度に「先輩ナースと管理者のためのセルフケア支援研修」を受講した看護師が公開リフレクションを行い、セルフケア支援の学びを深めた。慢性疾患系の病棟や外来のみならず、救急病棟や NICU での実施もなされた。 （３） セルフケア支援の記録：セルフケア支援の記録について、SCAQ スコアと支援内容の記入、および、SCAQ のレーダーチャート（エクセルファイル）を電子カルテに導入。外来や病棟、病棟間の継続支援や連携などについて検討した。 （４） 院内でのセルフケア支援教育：プロジェクトメンバーと院内の教育企画室と連携して、経験年数 3 年目程度の人を対象とする「セルフケア看護研修（プライマリーナース ベーシックコース）」を実施した。また、プロジェクトメンバーが企画した、熟練ナースを対象とする「先輩ナースと管理者のためのセルフケア看護研修会」を実施した。
次年度の予定 （概要）	（１） 定例研究会、事例検討、セルフケア支援教育の継続：月 1 回の定例研究会を継続し、年 1～2 回のセルフケア支援研修を企画・運営する。 （２） セルフケア支援教育の評価：赤十字助成金研究「看護部の理念を具現化する「セルフケア支援」を行う看護師を育成するプロジェクトの検討」で、セルフケア支援研修会の実施と評価を行う（前後比較等）。 （３） 成果の公表：看護系の学術集会にて、H30 の成果を公表する。 *平成 30-31 年度赤十字助成金にて、研究的取り組みを実施している。

8) シームレスな看護師教育モデルの検討：しなやかな葦のような強いナースを育てる会

年度	平成 30 年度 報告書
リーダー	川上潤子（日本赤十字社医療センター）
メンバー	川上潤子・渡邊美香・後藤薫・加藤まこと・高橋有希・鬼頭幸子・野口歌奈子 （日本赤十字社医療センター） 江本リナ・本庄恵子・守田美奈子・佐々木幾美・西田朋子 （日本赤十字看護大学）
ねらい	教育現場と臨床が相互に協力しあい、基礎教育から継続教育に至るまでのシームレスな教育モデルを検討する。また、骨太のナース、しなやかな葦のような強いナースを育むことをめざす。
今年度の報告 （概要）	卒後 2、3 年目看護師による新人看護職員研修の評価を目的とし、平成 28 年度に、臨床経験 2 年目 2 名および 3 年目 2 名の看護師を対象に、2 年目と 3 年目の合同グループインタビューと 2 年目と 3 年目それぞれに分けたグループインタビューを実施した。 平成 29 年度は、平成 28 年度に行った合同グループインタビューの分析を行い、新人看護師研修は学生時代に身につけた知識や技術の応用を学び実践をイメージ化させたり、理想と現実のギャップを埋めたりする機会となっていることが明らかにされた。また、日々の実践を通して基礎教育で学んだことに立ち返り、先輩や患者から知識や技術を習得して成長していくことが明らかにされた。そして、同期同士や他者からのフィードバックが成長の重要な鍵になることが示唆された。これらの研究成果を、第 18 回日本赤十字看護学会学術集会にて発表した。 平成 30 年度は、2 年目と 3 年目それぞれに分けたグループインタビューの分析中で、結果をまとめるに至っていない。
次年度の予定 （概要）	①2 年目と 3 年目それぞれに分けたグループインタビューの結果を分析し、それぞれの時期による新人看護職員研修の捉え方を明らかにする。 ②合同グループインタビューの結果と統合し、新人看護職員研修の課題を明らかにする。 ③看護基礎教育との連続性、看護実践能力の獲得、キャリア発達の視点から分析を重ね、基礎教育と臨床が相互に協力し合える研修のあり方を検討する。

E. ホームカミング・デー

a. 趣旨

ホームカミング・デーは、本学の卒業生・修了生の交流や卒後の学びの場を提供するために、年に1回開催されている。これまでも、卒業生・修了生が卒後の学びの場として活用できるよう、臨床現場に活かせる看護研究や子育てしながら働くことなどをテーマに教員および卒業生・修了生を招き、講演・シンポジウムを開催してきた。平成30年度は、テーマ「様々な可能性にチャレンジし続ける卒業生・修了生たち」とし、海外で外国人看護師の国家試験支援に携わっている卒業生、海外で助産師として活動した卒業生、訪問看護ステーションを立ち上げた卒業生、病院で専門看護師として活躍している修了生を招いて、シンポジウムを開催した。

b. 活動内容

本年度は、平成30年11月24日（土）の11時～13時に開催した。参加者は、41名であった。これまでも課題であった参加人数に関しては、例年通りとなった。

プログラムの内容は、4名の卒業生・修了生を招いて、テーマ「様々な可能性にチャレンジし続ける卒業生・修了生たち」のシンポジウムとした。シンポジストとして、海外で外国人看護師の国家試験支援に携わっている朝戸 サルヴァドル 千鶴さん（6回生・フィリピン在住 通訳・コーディネーター・日本語教師）、海外で助産師として活動した経験のある有原美智子さん（17回生・横浜創英大学精神看護学領域）、訪問看護ステーションを立ち上げた岡田靖子さん（11回生・訪問看護ステーションてんとうむし看護師）、小児看護専門看護師として活躍中の尾高大輔さん（大学院16回生・武蔵野赤十字病院小児看護専門看護師）をお招きした。

参加者からのアンケート結果より、プログラムの内容は、非常によかった、ややよかったが100%であり、大変好評であった。一方、内容が豊富であったことから、時間が少なかったとの意見もあった。参加者が41名と昨年同様の人数であり、目的としていた「本学の卒業生・修了生の交流や卒後の学びの場を提供する」は昨年並みに達成できたが、参加者の更なる増加が望まれる結果となった。

c. 今後の課題と展望

例年、参加者が教員を含めて30～40名前後と参加者の数が少ないことが課題として挙がっており、今年度は広報の方法も検討し、より若い世代に参加してもらえるよう、卒後3年目までの卒業生には全員にはがきを郵送するなど丁寧な広報活動を実施したが、参加者の増加には結びつかなかった。来年度は、より早期にテーマおよび具体的な内容を周知できるよう、広報活動を行うとともに、本学大学院進学に結びつくような若い世代にアピールできるプログラム内容を検討し、参加者たちと教員の交流がより活発になるような企画も合わせて検討していく。

平成 30 年度 日本赤十字看護大学 地域連携・フロンティアセンター実績報告
作成年月 平成 31 年 4 月
発行 日本赤十字看護大学 地域連携・フロンティアセンター
編集 フロンティアセンター 広報
〒150-0012 東京都渋谷区広尾 4-1-3
日本赤十字看護大学
電話 : 03-3409-0875
FAX : 03-3409-0589
